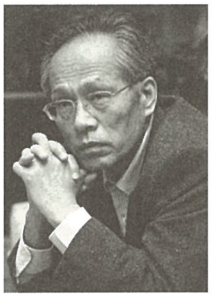
真のインターナショナル，グローバル化とは何なのか？
エスペラントを学び，広めた人々の足跡。

佐高信
評論家
週刊金曜日編集委員

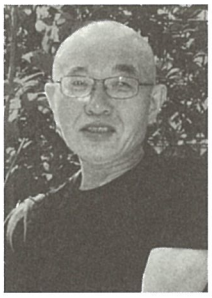


世界共通語によって国家の壁を越えようとするエスペラント人脈というのがある。ザメンホフを創始者とするその鉱脈は深く，そして広く，ロマン・ロランから魯迅にまで及ぶ。ユーゴスラヴィアの大統領，チトーもその一人だった。日本では大杉栄をはじめ，宮沢賢治，井上ひさし，安部公房などが知られている。「世界のいろはが一つになるぞよ」と言った大本教の出口王仁三郎も重要なこの一人である。市民の科学者として反原発の運動をリードした高木仁三郎や反権力のジャーナリスト，本多勝一もエスペラント人脈につらなる。吉永小百合の縁戚の長谷川テルも，もちろん，この事典に取り上げられている。反差別の国際的な連帯をめざすエスペラント運動は世界平和のための貴重な伏流水であり，この人物リストは日本の知的財産として多くの読者に自信を持って薦めたい。

宝井琴桜
講釈師

講釈師　見てきたような嘘をつき　私は古典を大事にしつつ創作にも取り組んでいる。「講談・長谷川テル」は嘘ではなく真実に添った話しになっている。山梨県生まれ，奈良女子高等師範学校に入学してエスペラントと出会い，人類が共通の言葉をもてば国や民族の違いをこえて理解することができる，世界の人々が手をつなぐ事ができると日頃は無口なテルが語り出す。そしてエスペラントを通して中国人留学生と結婚し上海に渡った，日中戦争勃発３ヶ月前の事。戦争下では日本軍兵士に「あなたがたの敵は海の向こうにいるのではない」と反戦放送をし，世界のエスペランティスト達に平和を呼びかけ日中のかけ橋たらんとしたテル。テルを支えた“エスペラント”。人間の未来にとってもっともっと大事にすべきものだと思う。

馬場マコト
ノンフィクション作家



ある日突然，本事典の編者後藤教授から，私の父，馬場八十松の項のチェック依頼メールが舞い込んだ。なぜ教授が「無名」のノンフィクション作家と「無名」のエスペランティストが親子であると知ったのか不思議だった。私は昨年末上梓したある本のあとがきで，父の名を出し，父と戦争のことをほんの少しだけ書いた。が，エスペラントに触れることはなかった。私の著書を偶然読んだ後藤教授は，あとがきに父の名前をみつけ，ふたりが親子であると確信し，問い合わせたのだ。そのことに気づいた時，私は編者の執念に驚愕した。この事典にはエスペラント運動に関わった約2900名のことが記されているという。運動は多くの「無名」の人々によって支えられてきた。その「無名」の一人ひとりを偏愛し，日本での運動の全貌に初めて追ったのが，本事典だと確信する。

平出隆
詩人
多摩美術大学教授

私はエスペラントに対して，時折り手を伸ばそうとするばかりの者に過ぎない。だが，エスペランティストであった祖父の遺品に，いくぶんか，慕わしい神秘の影を感じて育ち，少年時から時間をかけて，そこに強い夢の軸のあることを，ゆっくりと理解してきた。それは，「もうひとつの世界」への夢というべきものである。

後年，祖父の漂泊の跡を辿り，遺された原稿や画稿から，同志との交友ぶりや自然との交信をわくわくする思いで探査しはじめ，一冊の本にまとめた。その後，『日本エスペラント運動人名事典』の刊行準備のことを知り，いまこうしてみごとな見晴らしの，より大きな探査の成果を手にしている。手にとってページを繰るうちに，おびただしい人々の生涯に，夢の強い軸が霜柱のように立つさまを見る。ここにすでに，「もうひとつの世界」はあらわれている。

米沢富美子
物理学者
慶應義塾大学名誉教授

誰もが学べることを至上の目的に作られたエスペラントの文法体系は簡単だが，語彙はロマン語系統から採用されている。母国語から語彙を類推できない日本人にとって，エスペラント語習得は，英独仏西伊語などと比較して多少荷が軽いとはいえ，容易な仕事ではない。2000 近くの基礎語を記憶するのも大事業だ。「希望する人」を意味するエスペラントという言葉も，ロマン語系だし…。しかし，政治や宗教に支配されない国際語を，という理想は夢だ。言語のちがう諸民族間の相互理解を目的とするエスペラント運動は，さまざまな平和思想と影響を与え合いながら進められてきた。甘い感傷と一蹴されかねない理想が，か細い脈絡を保ちつつ，時代を超え国境を越えて生き長らえたのは意義高い。21 世紀の激動の今こそ，この理想を再び燃やす時ではないか。その時期の本書の出版。最高のタイミングだ。